

217 死亡肺癌例における併発肺感染症の検討

浜松労災病院内科¹，浜松医科大学第2内科²
○長谷川潤¹，川勝純夫¹，佐藤篤彦²

〔目的〕肺癌に併発する肺感染は、癌自体の気道進展による閉塞性肺炎と、日和見肺感染が2大発生要因と考えられている。これらは肺癌の組織・臨床病期・抗癌治療等により関与の仕方が異なると考えられ、肺感染の病態も相違があると思われる。この実態の解析を目的に、死亡肺癌例に臨床・細菌及び病理学的検討を加えた。

〔対象〕昭和60年6月～当科で死亡した原発性肺癌症例45例
〔方法〕病歴と胸部X線をもとに、肺癌組織型・病期・肺感染病型・抗癌治療・肺感染の治療効果・原因菌及び死因、さらに剖検例では病理所見も加え比較検討した。

〔成績・結論〕1)肺感染の合併：60%に認められ、類表皮癌で80%と高率だった。閉塞性肺炎は、類表皮癌に好発し、日和見肺感染は、Ⅳ期で70%と高率であった。2)抗癌治療：併用療法群と無治療群で高率に合併した。3)肺感染の治療効果：閉塞性肺炎は良好に反応したが、日和見肺感染で死亡例が多かった。4)原因菌：インフルエンザ桿菌、緑膿菌が閉塞性肺炎で検出され、グラム陰性桿菌、MRSA及び菌不明は、日和見肺感染に多かった。5)死因：肺感染死は41%であった。6)剖検所見：30例で剖検を行った。病理学的肺炎を40%に認めた。分布は、右下葉で78%，両側に及ぶもので45%と多かった。個々の症例で肺炎は種々の組織像が混在したが、急性像主体7例，器質化像主体5例であった。後者では、所属気管支に腫瘍による通過障害が認められた。

219 活動性肺結核を合併した肺癌例の検討

国立療養所中野病院 外科

○小川伸郎、宮澤秀樹、阿部能明、栗栖純穂、矢野 真、森田敬知、稲垣敬三、荒井他嘉司

今回我々は、当院における肺結核と肺癌の合併例を検討し、若干の知見を得たので報告する。

対象・方法：昭和57年より63年までの7年間に経験した、肺癌と活動性結核の合併例39例を対象として、合併頻度、年齢、性別、喫煙指数、診断時期、両病変の病巣の位置的關係、病理所見、予後等を検討した。

結果：7年間に当院に入院した肺癌患者は917人、活動性肺結核患者は3035人で、肺癌例に対する結核合併頻度は4.3%、結核例に対する肺癌合併頻度は1.29%であった。人口動態統計から求めた3035人の性年齢別期待肺癌死亡数の和は1.9人で、これを一般人の肺癌発生率と仮定すると、結核患者では21倍の肺癌発生率となった。病巣部位は同側85%、同一肺葉内66%、同一区域内41%で、診断時期は結核先行57%、肺癌先行33%、同時10%であった。男女比は35:4で男性に多く平均年齢は69才。35例が喫煙者で指数の平均は1220であった。癌の組織型は腺癌20%、扁平上皮癌51%、小細胞癌23%、大細胞癌3%、不明3%であった。手術例5例中3例は病理学的にも両者が混在しており、3例とも結核病巣から発生した肺癌と考えられた。結論：活動性結核と肺癌の合併頻度は高く、また同側、同一肺葉に発生しやすいことより、両者間の因果関係が示唆された。また扁平上皮癌、小細胞癌が多いことより、結核による慢性刺激、局所の癌原物質の浄化作用の低下などが肺癌発生の要因と考えられた。

218 肺小細胞癌の直接死因となった病態の検討

東京医科歯科大学第2内科

○吉澤正文、吉村信行、堤 和弘、東條尚子、市岡正彦、篠原陽子、筒井秀人、嶋瀬順二、千田 守、宮里逸郎、谷合 哲、丸茂文昭

目的：肺小細胞癌の予後改善のためには初回治療でのcomplete response率の向上が重要であるが、一方で死因に直結した病態の発症を抑え、あるいは早期治療に努めることも必要と考えられる。そこで肺小細胞癌の直接死因となった病態を分析し考察を加えた。

対象と方法：最近約8年間に当科および関連施設において死因を詳細に検討しえた小細胞癌症例46例を対象とした。直接死因となった病態とはこれを予防あるいは治癒させれば延命が期待できたと考えられる病態とした。

結果：46例中、男33例、女13例で年齢は44-81歳(平均64.7歳)。臨床病期はlimited disease 21例、extensive disease 25例、performance statusは1:30例、2:5例、3:10例、4:1例であった。直接死因となった病態は癌の進展による呼吸不全16例、肺炎9例、肝転移に伴う肝不全、閉塞性黄疸4例、敗血症4例、悪液質4例、脳転移3例、肝転移巣よりの出血1例、その他5例であった。原発巣は良くコントロールされながら肝転移が直接死因に関与した例が3例みられた。

考察：1. 直接死因の35%は肺、胸膜への腫瘍浸潤による呼吸不全死であり早期診断、強力な初回治療が不可欠である。2. 肝転移が死因に直結した例が11%ありその多くで原発巣のコントロールが良いことから抗腫瘍剤肝動脈内注入療法などの意義を再評価する必要がある。

220 慢性閉塞性肺疾患に合併した肺癌の検討

近畿大学第4内科

○久保裕一、東田有智、西村直己、村木正人、原口龍太、杉原隼三、中野直子、山本 淳、上西豊基、荻原順一、津谷泰夫、中島重徳

〔目的〕肺癌の危険因子として肺線維症等の慢性呼吸器疾患があげられているが今回、われわれは、肺癌症例に慢性閉塞性肺疾患(以下COPD)がどのような関係を有するか検討する目的でそれらの背景因子と呼吸機能、肺癌の組織型、臨床病期・治療等について検討したので報告する。

〔対象および方法〕1984年から1989年までの5年間に当科入院した肺癌患者196例中COPD 75例で、男性44例、女性31例であった。平均年齢64.5歳、病期はⅠ期5例、Ⅱ期2例、Ⅲa期14例、Ⅲb期13例、Ⅳ期41例であった。組織型では扁平上皮癌27例、腺癌36例、大細胞癌5例、小細胞癌5例、腺様嚢胞癌1例、カルチノイド1例で喫煙係数は、B.I 846.8であった。肺機能検査上ではVC 2150ml、%VC 89.5%、FEV_{1.0} 1556ml、FEV_{1.0}% 73.5%であった。P.S.は0~1 51例、2以上は24例であった。

〔結果および考察〕COPDを合併した肺癌症例は、1)性別では男性に多く、2)年齢・Stage共、発見時にはすでに高齢で進行しているものが多かった。3)P.Sは2以上の症例が多く、4)B.Iでheavy smokerが多い傾向が観察された。したがって、肺癌とCOPDの合併はまれでなく、発見時、高齢であり、P.Sの悪いものが多かった。